

P17

下顎左側第一大臼歯埋伏の萌出誘導を行った一症例

○比嘉 和、小笠原榮希、平川栄二、馬場篤子、尾崎正雄

福岡歯大・成育小児歯

【緒言】埋伏歯の好発部位は上下顎智歯、犬歯、下顎第二小白歯の順に多く、第一大臼歯の頻度は低い。埋伏・萌出遅延を示す歯に対する処置は、歯列内に誘導・配列するか、放置あるいは抜歯するかで大別される。基本的に、埋伏歯自体に極度の形成異常や骨性癒着等がみられない限り、歯列内誘導を試みる。今回、我々は、下顎左側第一大臼歯が完全に埋伏した9歳の男児に対し、開窓および牽引を施し、良好な咬合関係が得られたので報告する。

【症例】患児：9歳6か月 男児

初診日：平成15年7月23日

主訴：左下の奥歯が出てこない

家族歴・既往歴：特記事項なし

【処置および経過】紹介元の歯科医院にて、開窓を試みたが、処置困難なため中断され、紹介により当科に来院した。初診時に、パノラマエックス線、顎骨側方斜位撮影を行ったところ、左側下顎第一大臼歯は低位に埋伏し、歯根は未完成であった。癒着などの所見は認められず、右側と比べると根の形成は遅延していた。平成15年12月1日、局所麻酔下で開窓術を施行した。半年後に萌出傾向を認め、1年3か月後に萌出完了した。開窓、牽引から7年間、咬合管理を行い、良好な咬合関係が得られた。

【考察】埋伏した第一大臼歯を開窓、牽引し、歯列内に配列した報告は少ない。埋伏部の放置による成長・発育や、隣在歯への影響を熟考し、適切な治療計画のもとに牽引などの早期の処置が必要であり、正しい咬合位に萌出させることが重要であると考えられた。

P18

口唇閉鎖に影響を与える上唇小帯高位付着について

○中尾哲之、麻生郁子 なかお小児歯科

【目的】歯列、咬合に影響を与える因子として口唇の機能すなわち口唇閉鎖について考えてみたい。口唇閉鎖は、上下的な口唇閉鎖力と前後的な口唇圧の合力により成り立っている。口唇閉鎖に影響を与える因子の一つとして上唇小帯高位付着が、考えられる。上唇小帯高位付着という構造的な問題があると、上唇の運動障害が起こり、閉鎖力に影響が出て来ることが考えられる。本院では上唇小帯高位付着のケースで口唇閉鎖力改善のため小帯切除術を施しているが、その前後で口唇閉鎖力の変化を調べたのでその内容について報告したい。

【方法】対象は、本院に来院した6～10歳の患児で上唇小帯の高位付着を認め小帯切除術を実施した28名である。計測はパタカラ社製 Beauty Health Checker で術前、抜糸時、一定期間経過後で行った。計測は1分間隔で4回計測し平均値を算出した。

【結果】口唇閉鎖力の計測単位は、(N)である。小帯切除術前の口唇閉鎖力は、平均4.18であり、抜糸時は4.29、一定期間経過後では平均5.75であった。一定期間経過後に値が増加したものは、18症例であり、減少したのは、10症例であった。

【考察】術前から術後一定期間経過後では、多数の症例で閉鎖力が増加していた。しかし減少している症例も少しあった。これは計測方法も関係していると推測した。今回の結果から上唇小帯切除のみでなく、リップトレーニングを実施するのも有効だと考えられる。